

SPODフォーラム2026 ポスターセッション取組一覧

番号	テーマ	発表代表者			共同発表者
		氏 名	所 属	SPOD 加盟校	
1	スチューデントサクセス志向の伴走型アドバイジング	進藤 純平	茨城大学 スチューデントサクセスセンター アカデミックアドバイジング室		大津 正知(茨城大学 教学イノベーション機構 アカデミックアドバイジング室) 菊池 昌彦(茨城大学 学務部学務課 アカデミックアドバイジング室) 池野上 奈央(茨城大学 なんでも相談室) 西川 陽子(茨城大学 教育学部 スチューデントサクセスセンター)
2	Z世代の特徴から考えるゲーミフィケーション授業改善	宮崎 大樹	大阪成蹊大学 教育学部		
3	学生の関心をつなぐ生成AIマッチングの開発と実践	熊谷 美衣菜	新潟大学 人文学部		畑野 美紀(新潟大学 経済科学部) 阿部 隆騎(新潟大学 工学部) 藤井 心美(新潟大学 人文学部) 諏訪 允野(新潟大学 医学部) 木野 恵吾(新潟大学 教育基盤機構)
4	新潟大学におけるセルフメイドマイナー類型化の試み	阿部 隆騎	新潟大学 工学部		西岡 寧々(新潟大学 大学院総合学術研究科 自然科学専攻生命環境・食料科学プログラム) 志太 穂果(新潟大学 創生学部) 鈴木 友陽(新潟大学 理学部) 木野 恵吾(新潟大学 教育基盤機構)
5	生成AIを活用したSA業務知識習得テスト開発	吉田 もとな	新潟大学創生学部3年		内山 真桜(新潟大学 理学部3年) 木野 恵吾(新潟大学 教育基盤機構)
6	学生参画に対する学生の意識調査	小林 珠子	龍谷大学 学修支援・教育開発センター		栃木 紅美(龍谷大学 教学企画部)
7	校友と連携した教職協働による教員志望学生の育成	地主 成美	早稲田大学 教職支援センター		米内 達也(早稲田大学 教職支援センター) 中山 史絵(早稲田大学 教職支援センター) 岡崎 成光(早稲田大学 教職支援センター)
8	生成AIとAPIで実現する大学の公開情報悉皆調査	葛西 崇文	愛媛大学 教育・学生支援機構	○	
9	LMSによる情報共有を活用したグループワーク	南川 慶二	徳島大学 教養教育院	○	
10	中堅層大学職員向け研修プログラムの効果に関する研究	佐藤 浩輔	大阪体育大学		
11	共に歩む課題解決	山本 博	京都橋大学 情報システム部 情報システム課		
12	認証評価を活用したSD研修による次世代育成の取組み	前河 泰正	大阪国際大学 IR室		
13	介入的支援におけるアドバイジングの位置づけ	清水 栄子	愛媛大学 教育・学生支援機構	○	上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構) 中山 晃(愛媛大学 教育・学生支援機構) 中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構)
14	大学中退予測の変数と方法論的課題	真鍋 亮	東北大学 理学研究科		中山 晃(愛媛大学 教育・学生支援機構) 中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構)
15	大学の未来を予測する	上月 翔太	愛媛大学 教育・学生支援機構	○	
16	リーディング／ライティング教育の学問分野別特性	上月 翔太	愛媛大学 教育・学生支援機構	○	蝶 慎一(香川大学 大学教育基盤センター) 飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター 教育改革推進部門) 加藤 朱莉(新居浜工業高等専門学校 機械工学科)
17	TF・GSIの実態とその特徴－コア校を事例として－	蝶 慎一	香川大学 教育推進統合拠点 大学教育基盤センター	○	上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構) 吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター) 飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター) 寺田 悠希(高知大学 学び創造センター 学びの質保証ユニット)
18	生成AIを活用した「FD・SDコンテンツ」の改善	飯尾 健	徳島大学 高等教育研究センター	○	吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター) 仲道 雅輝(愛媛大学 教育・学生支援機構) 上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構) 杉田 郁代(高知大学 学び創造センター)
19	日本の大学における包括的学術開発の基礎的検討	吉田 博	徳島大学 高等教育研究センター	○	竹中 喜一(近畿大学 IR・教育支援センター) 杉森 公一(北陸大学 高等教育推進センター) 西野 毅朗(京都橋大学 経営学部)
20	「成績不振・不登校学生支援のTips」の開発報告	杉田 郁代	高知大学 学び創造センター	○	坂本 智香(高知大学 学び創造センター) 大沼 泰枝(香川大学教育推進統合拠点 学生支援センター) 井ノ崎 敦子(徳島大学キャンパスライフ健康支援センター) 塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター) 蝶 慎一(香川大学 大学教育基盤センター) 吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター)
21	保育分野における学生参加型FD開発の成果と課題	塩川 奈々美	徳島大学 高等教育研究センター	○	寺川 夫央(今治明德短期大学 幼児教育学科) 船本 孝子(徳島文理大学短期大学部) 十河 治幸(今治明德短期大学 幼児教育学科) 吉井 ゆだね(今治明德短期大学 幼児教育学科) 勢井 香菜子(徳島文理大学 人間生活学部 児童学科)
22	保育士養成課程で学ぶ学生の苦手意識に関する考察	船本 孝子	徳島文理大学 短期大学部保育科	○	勢井 香菜子(徳島文理大学 人間生活学部 児童学科) 寺川 夫央(今治明德短期大学 幼児教育学科) 十河 治幸(今治明德短期大学 幼児教育学科) 吉井 ゆだね(今治明德短期大学 幼児教育学科) 塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター)
23	大学間連携による協働開設科目の成果可視化と点検評価	藤本 正己	山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室		岩野 摩耶(山口大学 教育・学生支援機構教学マネジメント室) 河本 博史(山口学芸大学・山口芸術短期大学 学生部) 高野 純一(山口県立大学 将来構想推進局 DX・IR推進室) 林 省一(山口県立大学 将来構想推進局 SPARC推進室) 藤田 采花(山口県立大学 将来構想推進局 SPARC推進室) 松村 納央子(山口学芸大学) 吉村 耕一(山口県立大学 看護栄養学部 看護学科) 渡邊 早苗(山口大学 学生支援部 教育支援課)
24	AI対応情報関連授業へのAI導入と設計	大野 玲	新居浜工業高等専門学校	○	

No.1

スチューデントサクセス志向の伴走型アドバイジング

◆発表代表者

進藤 純平(茨城大学 スチューデントサクセスセンター アカデミックアドバイジング室)

◆共同発表者

大津 正知(茨城大学 教学イノベーション機構 アカデミックアドバイジング室)

菊池 昌彦(茨城大学 学務部学務課 アカデミックアドバイジング室)

池野上 奈央(茨城大学 なんでも相談室)

西川 陽子(茨城大学 教育学部 スチューデントサクセスセンター)

◆発表概要

本年4月、茨城大学はアカデミックアドバイジング室を設置し、学生一人ひとりのスチューデントサクセスを目的に、目標設定から行動計画策定までを伴走・支援する全学的な取組を開始した。具体的には、DP ルーブリックを活用した振り返りや学びの意図の確認、面談を通じた課題の言語化や省察の機会の提供、学内各部署と連携するハブ機能を担っている。多様化する学生のニーズに対応し、主体的な学習の促進(副専攻的な教育プログラムの履修等を含む)、大学への適応、スタディスキルの習得、大学への帰属意識の向上、大学院進学への動機づけ、退学予防等の効果が期待される。現在、特定学部等を対象にした全員個別面談(約400人)のほか、希望者への面談、学習習慣を身に付けるためのセミナーの開催等を実施しているが、これらの活動は DP ルーブリックやなんでも相談室等の既存の仕組みを組み込むことで、相補的かつ相乗的な効果をねらったものでもある。

No.2

Z世代の特徴から考えるゲーミフィケーション授業改善

◆発表代表者

宮崎 大樹(大阪成蹊大学 教育学部)

◆発表概要

本発表は、Z世代の特徴と授業改善の取り組みであるゲーミフィケーション型授業の関連を示しながら、その成果と課題について考察を加えてまとめたものである。現在の大学生の多くがあたるZ世代は、「即時性」「速さ」「手軽さ」を求める傾向にあり、その瞬間を楽しむ「現在志向」が強いという特徴があるといわれている。このような特徴を持つ学生を対象に授業を行う場合、教材・指導方法ベースの授業改善からの脱却を図り、学生ベースの授業改善に取り組むことが重要だと考えた。そして、その際には個々の学生の特徴を捉えて対応しようとするだけでなく、世代という大きなフレームで学生の特徴を捉え、その特徴に応じた改善をすることで新たな効果を得られるのではないかと考えた。そこで、これまでの授業から、ゲームの要素を取り入れたゲーミフィケーション型授業への改善に取り組んだ。本発表では、両者の関連を中心に授業改善の取り組みについてまとめた。

No.3

学生の関心をつなぐ生成 AI マッチングの開発と実践

◆発表代表者

熊谷 美衣菜(新潟大学 人文学部)

◆共同発表者

畑野 美紀(新潟大学 経済科学部)

阿部 隆騎(新潟大学 工学部)

藤井 心美(新潟大学 人文学部)

諏訪 允野(新潟大学 医学部)

木野 恵吾(新潟大学 教育基盤機構)

◆発表概要

新潟大学 NICE プログラム SA5 名で構成する「生成 AI チーム」は、2025 年度末に本学で開催された GPTs コンテスト「Future Makers - GPTs Challenge -」にて、チームが開発した「新潟大学 SA マッチングシステム (NU-SAMS (ニューサムス))」を発表し最優秀賞を受賞した。

開発軸は受講生にとって満足度の高い効果的なピア・サポートの実現である。本システムは、学修相談を希望する学生が持つメジャー・マイナーに関する学びの興味関心を、各 SA の専攻分野及びマイナーの学修内容と結びつける。

NU-SAMS の実装を目指し、「分野横断デザイン」受講生約 100 名を対象にして試行的に導入した。その後マッチング機能について受講生・SA 双方にアンケートを取り、システムの効果検証を行った。本発表では、本システムの開発プロセスと実際の機能、そして現段階での効果検証結果について報告する。

No.4

新潟大学におけるセルフメイドマイナー類型化の試み

◆発表代表者

阿部 隆騎(新潟大学 工学部)

◆共同発表者

西岡 寧々(新潟大学 大学院総合学術研究科 自然科学専攻生命環境・食料科学プログラム)

志太 穂果(新潟大学 創生学部)

鈴木 友陽(新潟大学 理学部)

木野 恵吾(新潟大学 教育基盤機構)

◆発表概要

新潟大学では、令和 6 年度より全学部を対象とした大規模なメジャー・マイナー制を導入しており、学生自身の興味・関心から探究課題を設定し、履修計画を設計する、すなわちセルフメイド型の「学修創生型マイナー」を提供している。

本学では令和 5 年度に「分野横断デザイン」を受講した「学修創生型マイナー」履修者 242 名のマイナー学修デザインを質的分析を用いて7つに類型化した(以下「7 類型」)。本研究は、令和 5 年度から令和 7 年度までに蓄積されたマイナー学修デザインを対象に、KHCoder を用いてテキストマイニングを行う。具体的には、マイナー学修デザインに記載された内容から単語を抽出し、出現頻度等を示しこれについて分析する。この分析結果を踏まえて学生が構想したマイナーの類型化(以下「新類型」)を行う。「新類型」を用いて「7 類型」を批判的に比較検討し、「7 類型」の妥当性をデータ収集年度の相違を考慮して考察する。

No.5

生成 AI を活用した SA 業務知識習得テスト開発

◆発表代表者

吉田 もとな(新潟大学 創生学部 3 年)

◆共同発表者

内山 真桜(新潟大学 理学部3年)

木野 恵吾(新潟大学 教育基盤機構)

◆発表概要

本発表は、新潟大学 NICE プログラム SA(スチューデント・アシスタント)を対象に、生成 AI を活用した SA 業務知識習得テストの企画・開発とその実施結果について報告する。従来の SA 研修では授業のグループワークに必要なファシリテーションに関するスキル習得が中心であり、SA 業務に必要な NICE プログラムの履修制度に関する知識習得は各 SA の裁量に委ねていた。そのため SA 間の知識水準に差がみられ、ピア・サポートの質保証が十分になされていなかった。そこで NICE プログラムの履修制度を網羅した「NICE プログラム履修ガイド 2026」を「NotebookLM」に学習させ、選択式 22 問、穴埋め式 11 問、記述式 3 問、計 36 問で構成するオンライン形式のテストを開発した。本発表では、その構築プロセスと実施結果を中心に報告し、大学教職員を対象にする生成 AI を活用した知識習得型研修の設計・評価手法への応用可能性を示す。

No.6

学生参画に対する学生の意識調査

◆発表代表者

小林 珠子(龍谷大学 学修支援・教育開発センター)

◆共同発表者

栃木 紅美(龍谷大学 教学企画部)

◆発表概要

龍谷大学では 2025 年度に学生参画に関わる 2 つの調査を実施した。1 つ目は全学を対象とした学生参画に関する実態調査、2 つ目は学生参画に従事する学生を対象にその活動を通して得た学びに対するアンケート調査である。これらの調査の結果から、学内各部署で多種多様な学生参画に関わる活動が実施されていることが明らかとなった。一方で、学生参画に対する教職員、学生の関心度や認知度が低いという課題も明らかとなった。これを踏まえ、2026 年度は全学生を対象とした学生参画の認知度・関心度・実効性に関わるアンケート調査を実施した。本ポスター発表では、本アンケート調査を通してみてきた龍谷大学生の学生参画に対する関心度、認識度、実効感について報告する。

No.7

校友と連携した教職協働による教員志望学生の育成

◆発表代表者

地主 成美(早稲田大学 教職支援センター)

◆共同発表者

米内 達也(早稲田大学 教職支援センター)

中山 史絵(早稲田大学 教職支援センター)

岡崎 成光(早稲田大学 教職支援センター)

◆発表概要

昨今の初等中等教育では、先行きが不透明で変動の激しい社会を生き抜くため、子どもたちに従来にはない多様な資質・能力の育成が求められています。こうした教育環境の複雑化および社会的要請を踏まえ、早稲田大学では教員養成を戦略的な事業と捉え、その教育的価値に注目しています。教育資源としての教職課程を実質化するには、多様な学生を受け入れ、学内外での活発な交流が生じていることが重要です。その発展には、かつては同じ学生の立場であり、現在の教育現場から情報発信活動を行う校友の存在・作用がカギとなります。そして、組織としての同窓会活動を活性化させ、継続的・恒常的な活動改善を促すには、担当職員が主導する教職協働や支援的マネジメントが不可欠です。本発表では、同窓会運営の支援に係る教職協働の現場事例から、これからの大学で重要とされる学生支援の創出や職員の実践的マネジメント能力の研鑽について報告いたします。

No.8

生成 AI と API で実現する大学の公開情報悉皆調査

◆発表代表者

葛西 崇文(愛媛大学 教育・学生支援機構)

◆発表概要

他大学の動向や先進事例を把握する際、全大学の Web サイトを手作業で巡回し、情報を探し出すことには膨大な時間と労力がかかる。本報告では、このような他大学の Web サイトに公開されている情報の調査業務を効率化するため、プログラムの動作環境構築が不要な Google Colab 上で構築した自動調査システムの実践事例を報告する。

本システムは、Python とシステム間を連携する API を融合させ、全国立大学の公式サイトから特定のキーワードを含む URL を悉皆的かつ迅速に CSV 形式で抽出する。特筆すべき点として、プログラムのコード生成やエラー解消に生成 AI を導入したことで、報告者のような専門家ではない人材であっても、短期間でのシステム開発を実現した。

このような事例を通して、デジタル技術の習得を SD としての個人のスキルアップに留めず、組織的なデータ収集を目的とした DX へと転換させるための実践知を共有する。

No.9

LMS による情報共有を活用したグループワーク

◆発表代表者

南川 慶二(徳島大学 教養教育院)

◆発表概要

学部学科が混在する教養科目(履修者 100 人前後)で組み合わせを変えながらグループワークを実施した。生物・物理・化学・工学に関連する分野横断的科目のため、事前に履修歴をアンケートで調査し、高校での生物選択者・物理選択者が混在するグループになるように調整した。講義の疑問点や考察の意見交換では、得意な分野が異なるため互いに教え合うことができた。また、各自で興味のあるテーマのプレゼンテーションを作成し、LMS のファイル共有を活用してグループ内で発表と意見交換を行った。この際にはテーマが近いグループに組み替えて意見交換を行った後に元のグループで報告するなど、数回のグループ替えを行った。最後に全体を 20 人程度の大人数グループに分けて同時進行の発表会を実施した。各グループの発表では大学院生が進行役と評価を担当した。これらのグループ編成による効果を報告する。

No.10

中堅層大学職員向け研修プログラムの効果に関する研究

◆発表代表者

佐藤 浩輔(大阪体育大学)

◆発表概要

近年、少子化の影響による学生数の減少、地方の大学や中小規模大学の経営基盤が弱まり、統廃合や学部再編の圧力が高まるなど、大学を取り巻く環境は大きく変化し、厳しい社会状況を生き残るために大学職員が求められる役割も大きく変わった。実際に職員が担っている役割は、事務処理レベルを越え、大学の未来がかかった政策立案や教育・学生支援など高い専門的な力量と改革案の企画・実践力が求められている。(篠田 2020)つまり、これまでのとおり事務処理を行うだけでなく、教育研究の発展や大学経営の強化に必要な専門的な力量を向上させて、より高度な役割を担うことが求められている。本研究は、昨年度に実施した中堅層の大学職員を対象とした研修プログラムを通じて、分析から得られた知見を整理するとともに、データ分析の方向性を示す。最終的には受講者にどのような意識変容や行動変容が生じたのかを明らかにする。

No.11

共に歩む課題解決

◆発表代表者

山本 博(京都橘大学 情報システム部 情報システム課)

◆発表概要

「パフォーマンスは関係性から生まれる」という考えのもと、教務課との対話から始まった伴走による課題解決の試みは、学生支援や人事課など計 7 課へと広がった。伴走を通じて職員は自走し、これまでできなかったことに挑戦できる効力感を得た。これにより、苦手分野でもモチベーションが高まり、取り組みサイクルが加速している。私たちは「つくる・届ける」にとどまらず、「ほどく・共感する」ことから始めることで、課題を対話的に整理し、最適な設計を模索し続けている。このプロセスで AI を多用しその効用を実感したが、取り組みの結果の質は、いかに良質な問い立てができていくかによって大きく左右されることにも気付かされた。この経験から、文化人類学的視点を取り入れた研修開発に至っている。本発表では、この一連のプロセスを紹介する

No.12

認証評価を活用した SD 研修による次世代育成の取り組み

◆発表代表者

前河 泰正(大阪国際大学 IR 室)

◆発表概要

本学では、ベテラン層の定年に伴う体制変革や第 4 期認証評価を見据え、中堅職員の能力養成が急務となっている。今回は学内の現状や第 3 期受審時での課題等を反映させることで次世代に情報(前回の課題等を認識させる)を継承するということも目的に、前回実施した SD 研修プログラムを一新・再構築した。

新プログラムでは、令和 6(2024)年度に受審した最新内容をリアルな教材として活用する。対面計 5 回の講義及びグループワーク形式を通じ、①認証評価の自分事化、②全体最適の視座獲得、③他部署間コミュニケーションの活性化を到達目標に掲げ、7 月末の完了に向け推進している。本発表では、大学の現状に即して刷新した SD 研修の実践プロセスとその取組結果について報告する。

No.13

介入的支援におけるアドバイジングの位置づけ

◆発表代表者

清水 栄子(愛媛大学 教育・学生支援機構)

◆共同発表者

上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構)

中山 晃(愛媛大学 教育・学生支援機構)

中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構)

◆発表概要

近年、アーリーアラートや早期介入など、学生の学習継続と成功を支える介入的支援(インターベンション)が、日本の大学において広がりつつある。こうした取り組みにおいて、アカデミック・アドバイザーは重要な役割を担うとされる。本研究では、アカデミック・アドバイジングおよびインターベンションに関する先行研究のレビューを行う。とくに RTI(介入への反応)に由来する Tier1(予防的支援)・Tier2(早期介入)・Tier3(個別集中支援)の階層的支援モデルに着目し、各段階でアドバイジングに期待される機能を整理する。とりわけ、各支援段階においてアドバイジングが果たす役割や、それらをどのように接続しているのかに着目する。そのうえで、学生支援におけるアカデミック・アドバイジングの位置づけを検討し、日本の大学の学生支援体制およびアドバイジング実践への示唆を得ることを目的とする。

No.14

大学中退予測の変数と方法論的課題

◆発表代表者

真鍋 亮(東北大学 理学研究科)

◆共同発表者

中山 晃(愛媛大学 教育・学生支援機構)

中井 俊樹(愛媛大学 教育・学生支援機構)

◆発表概要

大学生における中途退学(以下、中退)は、学生・大学・社会にとって重要な政策課題であり、近年、教学データや学習履歴データを用いた中退予測モデルの構築が進められている。本研究では、国内外の先行研究を対象にレビューした。その結果、予測変数をエビデンスの強度と日本の大学における取得可能性に基づき、中核・補強の2階層に整理した。また、従属変数の定義、縦断設計、退学理由の測定妥当性、マルチレベル構造、層化分析、予測と因果の区別という6つの方法論的課題を示した。さらに、基礎モデルの構築から介入効果検証に至る5段階の実装指針を提示した。本枠組みは、教学IRの実践と中退予防のための介入設計に資するものである。

No.15

大学の未来を予測する

◆発表代表者

上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構)

◆発表概要

SPOD フォーラム 2026 シンポジウム「デジタル技術が変える高等教育の未来」に関連づけて、本フォーラム参加者が高等教育の未来をどのように予測し、どのような未来を望ましいと考えているのかをアンケートを通じて調査したものを発表する。シンポジウムの内容と合わせて、「25年後の高等教育の姿」「その未来に向けて大学教職員が高めるべき力や取り組むべきこと」を多肢選択、自由記述で参加者に事前アンケートを行った結果を提示する。なお、シンポジウム関連企画として、シンポジスト、コメンテーター、企画者の連名での発表を予定している。

No.16

リーディング／ライティング教育の学問分野別特性

◆発表代表者

上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構)

◆共同発表者

蝶 慎一(香川大学 大学教育基盤センター)

飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター 教育改革推進部門)

加藤 朱莉(新居浜工業高等専門学校 機械工学科)

◆発表概要

本研究は大学における(第一言語での)リーディング／ライティングの教育について、何を目標に、どのように行うべきかについて、学問分野別の特性を明らかにすることを試みる。そのために日本学術会議大学教育の分野別質保証委員会が33の学問分野についてまとめている分野別参照基準、その中でもとりわけ「学修方法及び学修成果の評価方法に関する基本的な考え方」における関連記述を収集、比較する。この分析を通じて明らかになった特性から学問分野別のリーディング／ライティング教育の改善に資するFDの方向性を導く。

No.17

TF・GSIの実態とその特徴ーコア校を事例としてー

◆発表代表者

蝶 慎一(香川大学 教育推進統合拠点 大学教育基盤センター)

◆共同発表者

上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構)

吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター)

飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター)

寺田 悠希(高知大学 学び創造センター 学びの質保証ユニット)

◆発表概要

本発表の目的は、学修者本位の大学教育を支えるTF(ティーチング・フェロー:TAの上位職)やGSIに求められる資質・能力とその向上のあり方について関連情報を整理し、実践的な示唆を提供することである。具体的には、SPODコア校における取組事例を手がかりとして、制度や運用の実態、関連情報を整理する。これまで、SPODコア校におけるTFやGSIの制度・規程、業務内容、さらにはそれらを対象とした研修の実態については十分な調査・研究が行われてこなかった。そこで本発表では、令和8年度SPOD-FD調査研究プロジェクトの一環として、プロジェクトメンバーが所属する大学のTF・GSIに関する情報を集約・共有する。さらに、コア校を含むSPOD加盟校における指導補助者に関する共通理解の形成や、研修等で活用できるリソースの検討につなげるため、参加者との意見交換・情報交換を行う土台として本ポスター発表を位置付ける。

No.18

生成AIを活用した「FD・SDコンテンツ」の改善

◆発表代表者

飯尾 健(徳島大学 高等教育研究センター)

◆共同発表者

吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター)

仲道 雅輝(愛媛大学 教育・学生支援機構)

上月 翔太(愛媛大学 教育・学生支援機構)

杉田 郁代(高知大学 学び創造センター)

◆発表概要

SPOD-FD調査研究プロジェクト「オンラインによるFDプログラムの共同開発」では、各SPODコア校がリーフレットや動画等の形で開発・公開したFD、加えてSDに資するコンテンツを容易に検索・アクセスするためのデータベースおよびプラットフォームとしてSPODホームページ内に「FD・SDコンテンツ」を開設している。一方で対象とするコンテンツは年々増加しており、各コンテンツを検索可能なものとしてデータベースに収録するためには作業の省力化・効率化を進めることが求められる。そこで本プロジェクトでは現在、コンテンツのデータベース化と検索システムに生成AIを導入し、作業の省力化と効率化を図っている。本発表では「FD・SDコンテンツ」における生成AIの活用事例を示すことで同様の業務改善に資する情報を共有するとともに、生成AIの導入による「FD・SDコンテンツ」の変更点についても紹介する。

日本の大学における包括的学術開発の基礎的検討

◆発表代表者

吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター)

◆共同発表者

竹中 喜一(近畿大学 IR・教育支援センター)

杉森 公一(北陸大学 高等教育推進センター)

西野 毅朗(京都橘大学 経営学部)

◆発表概要

令和4年の大学設置基準改訂により、FDは「授業内容及び方法の改善」に加え、「教育研究活動等の適切かつ効果的な運営」を対象とする概念へと拡張された。欧米では、研究支援、管理運営能力開発、職員能力開発、リーダーシップ開発等を含む「包括的学術開発(Holistic Academic Development)」の必要性が論じられ、大学教員や専門職員の成長を支える取組として知見が蓄積されている。日本においても大学教育センター等の整備に伴い、学術開発を専門とするスタッフが配置され、多様な業務に携わっているが、必ずしも理論的に整理されているとは言い難い。本研究は、包括的学術開発に関する国際的議論を踏まえ、日本における教育開発者の役割を、理論的枠組みに照らし合わせて整理することを目的としている。本発表では、国内外の先行研究をレビューし、日本の大学における包括的学術開発の実態把握に向けた基礎的検討を行う。

「成績不振・不登校学生支援の Tips」の開発報告

◆発表代表者

杉田 郁代(高知大学 学び創造センター)

◆共同発表者

坂本 智香(高知大学 学び創造センター)

大沼 泰枝(香川大学 教育推進統合拠点 学生支援センター)

井ノ崎 敦子(徳島大学 キャンパスライフ健康支援センター)

塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター)

蝶 慎一(香川大学 大学教育基盤センター)

吉田 博(徳島大学 高等教育研究センター)

◆発表概要

近年、大学における成績不振や不登校の学生への支援は重要性を増している。そこで本発表では、先行研究や実態調査を基に、SPOD コア校の FDer(FD 担当者)と専門家が協働して開発した「成績不振・不登校学生支援の Tips」を報告する。

本 Tips は、属人的な対応から脱却し、部局全体で学生を支える「組織的支援」を可能にするための実践的なヒントをまとめたものである。当日は、Tips の実物を掲示するとともに、その策定における政策的意図や、各部局での具体的な活用方法について報告する。これにより、各大学における支援体制の構築と、組織的な FD 活動の活性化に寄与することを目指す。

保育分野における学生参加型 FD 開発の成果と課題

◆発表代表者

塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター)

◆共同発表者

寺川 夫央(今治明德短期大学 幼児教育学科)

船本 孝子(徳島文理大学 短期大学部)

十河 治幸(今治明德短期大学 幼児教育学科)

吉井 ゆだね(今治明德短期大学 幼児教育学科)

勢井 香菜子(徳島文理大学 人間生活学部 児童学科)

◆発表概要

本発表は、SPOD コア校の担当者と SPOD 加盟校 2 大学の保育士養成課程担当者らが連携し、実現した保育合同 FD 企画「学びのチャンスを逃がさない! 学生の苦手意識と向き合うワークショップ」について実践報告を行うものである。この合同 FD 企画は SPOD フォーラム 2025 開講プログラム「保育幼児教育分野のための FD を企画しよう」の開発過程で保育分野の担当者らによって考案されたものであり、その企画を実現した分野別 FD 開発の成果である。

この取組では学生を対象とした事前アンケートの実施や調査結果の考察、試行会による企画内容の検討を経て、授業改善に向けた議論を行った。授業改善に学生の意見を取り入れるべく、2 大学 3 学科の学生が参加し議論する学生参加型 FD となった。本発表では一連の取組内容を整理するとともに、FD 企画者・参加者双方の振り返りを踏まえて、今後の保育・幼児教育分野 FD 開発に向けた課題を議論する。

保育士養成課程で学ぶ学生の苦手意識に関する考察

◆発表代表者

船本 孝子(徳島文理大学 短期大学部 保育科)

◆共同発表者

勢井 香菜子(徳島文理大学 人間生活学部 児童学科)

寺川 夫央(今治明德短期大学 幼児教育学科)

十河 治幸(今治明德短期大学 幼児教育学科)

吉井 ゆだね(今治明德短期大学 幼児教育学科)

塩川 奈々美(徳島大学 高等教育研究センター)

◆発表概要

保育士養成課程では、弾き歌いやダンス、製作など様々な活動を通じて自己表現することが求められる。当該課程に所属する学生には「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」という保育の 5 領域において各領域における専門的知識や技能を修得し、保育士として成長することが求められている。発表者らは、保育士養成課程における教育現場において、学生が消極的な姿勢を示す場面があることに注目した。学生らには保育士を目指す者として苦手なことにも積極的に挑戦する姿勢が求められるが、どのような点に障壁を感じているのだろうか。

本発表では、発表者らによる合同 FD 企画に際して実施した「保育・幼児教育分野で学ぶ学生の苦手意識を考えるアンケート」についてその調査結果を分析する。保育士養成課程学生が苦手意識をもつ活動について整理を行い、その特徴を明らかにするとともに、その特徴を踏まえた授業改善について検討する。

大学間連携による協働開設科目の成果可視化と点検評価

◆発表代表者

藤本 正己(山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室)

◆共同発表者

岩野 摩耶(山口大学 教育・学生支援機構 教学マネジメント室)

河本 博史(山口学芸大学・山口芸術短期大学 学生部)

高野 純一(山口県立大学 将来構想推進局 DX・IR 推進室)

林 省一(山口県立大学 将来構想推進局 SPARC 推進室)

藤田 采花(山口県立大学 将来構想推進局 SPARC 推進室)

松村 納央子(山口学芸大学)

吉村 耕一(山口県立大学 看護栄養学部 看護学科)

渡邊 早苗(山口大学 学生支援部 教育支援課)

◆発表概要

2022年に地域活性化人材育成事業(SPARC)において、山口大学・山口県立大学・山口学芸大学の3大学協働による事業が採択された。本事業では、ひとや地域の課題解決に資する「文系DX人材」を育成することを目指し、教育課程の改編を行うとともに、3大学共通の資質・能力(6つの力)を養う「SPARC教育プログラム」を構築した。

同プログラムでは、各大学独自の授業科目、他大学で開設された授業科目を自大学で開設したものとみなす「連携開設科目」、3大学共同で授業科目を開設した「共同開設科目」を構築した。さらに、同プログラムにおける学習成果・教育成果の可視化・点検・評価・改善を一体的に行うために、3大学共通の「アセスメントプラン」を策定した。

本発表では、SPARC教育プログラムの概要をはじめ、アセスメントプランをもとにした成果を可視化する具体的な仕組み、点検や評価に基づく教育改善の取組を報告する。

AI対応情報関連授業へのAL導入と設計

◆発表代表者

大野 玲(新居浜工業高等専門学校)

◆発表概要

本報告では、AI・データサイエンス教育への対応を目的として設計した情報関連授業について紹介する。従来のアクティブラーニング(AL)の実践を踏まえ、生成AIの活用を前提とした授業内容を新たに構成した。授業では、学生が自身の端末を用いて情報収集や課題解決に取り組み、グループ学習と個別レポート作成を組み合わせることで学習を進める。生成AIは思考支援ツールとして位置付け、情報の整理や意見形成、レポート作成の各場面で活用する。本発表では、授業設計の過程とAL導入の方法を示すとともに、実施に向けた課題や今後の展開について報告する。